

〈個別報告〉

キリスト教王となるヴァイキング —クヌートの教会政策—

小澤 実

名古屋大学グローバル COE 研究員

1. British Library, Ms Stowe 944 6r
2. スヴェンの遺産
3. クヌートの教会政策
4. 政策の背景 (1) 対内的要素
5. 政策の背景 (2) 対外的要素
6. 普遍権威へ

1. British Library, Ms Stowe 944 6r

現在ブリティッシュ・ライブラリーの写本室に、ストーウェ写本 944 番として登録されている一冊の写本がある。主要部が 1031 年に作成された縦 260mm, 横 150mm のこの羊皮紙写本は、全体が 69 葉の羊皮紙から構成されている。この写本の全体は二部に分かれ、そのうち 6 葉から 61 葉までを構成する第一部が、「ニュー・ミンスターとハイド修道院の命の書」と表題された、当該修道院に関係する死者を記念する一種の典礼書である¹。

この写本には、合計三枚の挿絵が描かれている。いずれも、いわゆるウィンチェスター派と呼ばれる画派の流れを汲む絵師の手になるものである²。第 6 葉の裏面と第 7 葉の表面

*本研究は、平成 21 年度日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究 B）（研究題目：ルーン石碑の社会的機能に関する基礎的研究）ならびに平成 21 年度笹川科学研究助成金（研究題目：紀元千年前後北ヨーロッパにおける、スカンディナヴィア人の船舶利用に関する社会史的研究）の成果報告の一部である。

¹ 「生命の書 *liber vitae*」とは、死者を記念する祈祷をあげるために修道院が作成した典礼書。大陸のクリュニー系修道院のものが著名であるが、アングロサクソン期イングランドにも、ウィンチェスターのものを含めて三点が現存する。Simon Keynes (ed.), *The Liber Vitae of the New Minster and Hyde Abbey, Winchester* (Early English manuscripts in facsimile 26). København 1996. 研究として、Simon Keynes, “The Liber Vitae of the New Minster, Winchester,” in: David Rollason (ed.), *The Durham Liber Vitae and its context*. Woodbridge 2004, pp.149-163; Jan Gerchow, “Prayers for king Cnut: the liturgical commemoration of a conqueror,” in: C. Hicks (ed.), *England in the eleventh century*. Stamford 1992, pp.219-31.

² 当該写本の挿絵は、次のサイトで確認することができる。

には見開きでひとつの最後の審判図が描出されている。「命の書」という典礼テキストとの関係でいずれも興味深い挿絵であるが、ここでわたしたちが注目すべきは、第6葉表面に描かれた、この写本の献呈者を描いた挿絵である³。挿絵の構成は、おおよそ三段に分かれる。上段では、マンドルラの荘厳のキリストを、向かって右側から聖ペテロが、向かって左側からマリアが挟み込んでいる。中段の真ん中には祭壇上に聖十字架が配され、向かって右側に、天使から王冠を受ける王が、向かって左側に、天使からヴェールを受ける王妃が描かれる。人物の傍らにはラテン語でそれぞれ、「王クヌート Cnut rex」「王妃エルフギフ Aelfgyfu regina」という文字が書き込まれている。そして最下段である国王夫妻の足元には、アーチの中から聖十字架を見上げる修道士たちが7人描かれている。

この挿絵に描かれたクヌートこそ、デンマーク・ヴァイキングの出身でありながら、1016年にイングランド王となり、その後デンマーク王とノルウェー王も兼ね、11世紀初頭に北海を囲みこむ海上支配体制を確立したクヌート大王その人である⁴。ヴァイキングという、キリスト教とはもっとも縁遠い存在として考えられがちな人物が、なぜ、このようなキリスト教文化の精髓ともいえる「命の書」に描かれることになったのだろうか。それを理解するために、まずは、クヌートの父スヴェン双髭王によるイングランド征服にまでさかのぼってみたい。

2. スヴェンの遺産

イングランドの史料では991年にはじめてその名を確認することのできるデンマーク王スヴェン双髭王は、およそ二十年後の1013年秋、ウェセックス地域の実質的支配者であったエルフヘアを降伏させ、ロンドンを開城させることでイングランド王位を手に入れた⁵。

British Library, Catalogue of illuminated manuscripts, detailed record for Stowe 944 (<http://www.bl.uk/catalogues/illuminatedmanuscripts/record.asp?MSID=94&CollID=21&NStart=944>).

³ 当該挿絵の図像学的解釈について、以下の文献を参照。Catherine E. Karkov, *The ruler portraits of Anglo-Saxon England* (Anglo-Saxon Studies 3). Woodbridge 2004, pp. 119-56; E. C. Parker, "The gift of the cross in the New Minster *Liber Vitae*," in: E. Sears & T. K. Thomas (eds.), *Reading medieval images: the art historian and the object*. Michigan 2002, pp.177-186.

⁴ クヌートについてまず参照すべきは、Timothy Bolton, *The empire of Cnut the Great. Conquest and consolidation of power in northern Europe in the early eleventh century*. Leiden / New York 2008. さらに、Alexander R. Rumble (ed.), *The reign of Cnut, king of England, Denmark and Norway*. London 1994; M. K. Lawson, *Cnut. The Danes in England in the early eleventh century*. London 1993; Robin Fleming, *Kings and lords in Conquest England* (Cambridge Studies in Medieval Life and Thought, 4th series). Cambridge 1991; Laurence M. Larson, *Canute the Great and the rise of Danish imperialism during the Viking Age*. New York and London 1912.

⁵ スヴェンによるイングランド征服プロセスについては、次の研究が詳細に論じている。Ian

しかしながらその半年後の1014年2月3日、スヴェンは突然この世を去った。彼の軍隊を引き継いだクヌートは、エセルレッド2世ならびにエドマンド鉄腕王との間に激しい戦いを繰り広げ、1016年末、ついにイングランド王として認められるに至った。しかしながら彼は、即位と同時に、父から大きな遺産を受け継いでいたことを思い知ることになっただろう。それは、スヴェンの後継者という「悪評」である⁶。

スヴェンの死直後のイングランド人にとって、スヴェンの名は忌まわしい記憶を想起した。その記憶は複合的であり、次の四つの行為に起因する。第一に教会・修道院・諸都市の略奪である。ヴァイキングのイングランド襲撃目的の第一は、様々なかたちをとる財産の略奪である。より具体的には、宗教施設に保管されている金、銀、宝石等で装飾された聖遺物箱、典礼書、典礼具、軍隊を維持するための糧食や家畜、奴隷として売却するための現地住民の略奪である⁷。もちろんこれはスヴェンに限ったことではなく、ヴァイキングの侵入を経験した地域では普遍的に見られた現象であることは言うまでもない。しかしながらスヴェンがイングランドを襲撃する紀元千年前後のイングランドにおいて、その規模は以前と比べてはるかに大きなものとなっていたことは注記されるべきであろう⁸。

第二にデーングルドの徴収である。デーングルドとはイングランド王をはじめとする在地有力者が、ヴァイキングとの間に和平を確立するために、イングランドに広く課税することで徴収する貢納金を指す⁹。スヴェンは991年のイングランド侵入以来、994年、1002

Howard, *Swein Forkbeard's invasions and the Danish conquest of England, 991-1017*. Woodbridge 2003. また、イングランド史の視点から、Simon Keynes, "The Vikings in England," Peter H. Sawyer (ed.), *The Oxford illustrated history of the Vikings*. Oxford 1997, pp.195-217.

⁶ クヌートに対するスヴェンの遺産の問題は別稿にて論じた。Minoru Ozawa, "Cnut for Danelaw, Cnut against Swein: two aspects on the process of Cnut's conquest of England," *The Round Table* 22 (2008), pp.60-71.

⁷ Dawn M. Hadely, "Viking raids and conquest," Pauline Stafford (ed.), *A companion to the early middle ages: Britain and Ireland c.500-c.1100*. Oxford 2009, pp.195-211. 当該時期の奴隷に関しては、近年包括的な研究が刊行された。David Wyatt, *Slaves and warriors in medieval Britain and Ireland, 800-1200* (The Northern World 45). Leiden / New York 2009.

⁸ イングランド史においてヴァイキング襲撃の波は、8世紀末から940年代にかけての第一段階と980年代から11世紀半ばまでの第二段階がある。通常ヴァイキングの概論ではこの二分法を採用していたが、実のところ、ヴァイキングの被害を受けたすべての地域で同じペースでの襲撃がおこなわれたわけではない。たとえばスコットランドやアイルランドではイングランド中核部とは別のペースで襲撃が繰り返された。

⁹ デーングルドの徴収システムに関する出発点は、M. K. Lawson, "The collection of danegeld and heregeld in the reigns of Æthelred II and Cnut," *English Historical Review* 99 (1984), pp.721-38. なおこの論文が発表された後、『アングロサクソン年代記』に記された徴収金額が正しいかどうかをめぐる、ローソンとジョン・ギリングガムとの間で論争が展開されている。Idem, "'Those stories look true': Levels of taxation in the reigns of Æthelred II and Cnut," *English Historical Review* 104 (1989), pp.385-406; John Gillingham, "'The most precious jewel in the

年、1007年と数年ごとにデーンゲルドを手中にしている¹⁰。デーンゲルドは定期的な貢納金ではなく、本来その支払いをもって国外へ退去（991年と994年のオーラヴ・トリュックヴァソンの場合）もしくは一定期間にわたる非交戦状態（1009年と1014年のソルケルの場合）の継続が意図されている。ただしスヴェンに関してはそのような約束が守られた形跡を見いだすことができないし、支払われるべき総額も回を追うごとに跳ね上がっている。

第三に聖俗双方にわたるイングランド在地有力者層の大規模な変動である。古英語韻文『モルドンの戦い』で名高い991年の戦闘では、高位貴族であったブリュトノーズが戦場に散った¹¹。その後も、王国顧問会議を構成する数多くの聖俗の有力者がスヴェンとの戦いの中で命を落とし、旧来のイングランド支配構造は崩壊した¹²。これは一方ではゴドウィン家のような新興有力者層の台頭という現象を引き起こすが、ウェセックス王家から土地の授与や免税特権等を得ていた旧支配者層とその恩顧を受けていた集団にとっては既得権益を奪われる結果となった¹³。

四つ目はカンタベリ大司教エルフヘアの殺害である。1012年4月19日、ロンドン城外で集会を開き、おそらく大陸から輸入したワインで酩酊していたスヴェン軍は、人質として捕捉していた大司教に対して、骨と牛の頭を投げつけ、斧の柄で撲殺した¹⁴。翌日ドルチェスタ司教、ロンドン司教そしてロンドン市民がその遺体を受け取り、セント・ポール

English Crown’: Levels of danegeld and heregeld in the early eleventh century,” *English Historical Review* 104 (1989), pp.373-84; Idem, “chronicles and coins as evidence for levels of tribute and taxation in late tenth- and early eleventh-century England,” *English Historical Review* 105 (1990), pp.939-50.

¹⁰ 991年は10000ポンド、994年は16000ポンド、1002年は24000ポンド、1007年は36000ポンドが徴収されている。ASC EF a. 991, CDE a. 994, E a.1002, CD a. 1007. Charles Plummer & John Earle (eds.), *Two of the Saxon Chronicles Parallel, i: Text, appendices and glossary*. Oxford 1892, pp.127f., 133, 138.

¹¹ D.G. Scragg (ed.), *The Battle of Maldon A.D. 991*. Oxford 1991. テクストの翻訳として、上野義和訳『古英語の世界へ モルドンの戦い』（松柏社、1997年）。

¹² この支配構造の変化について、小澤実『クヌートの「北海帝国」統治と世俗有力者層 「北海帝国」期発給証書副署欄の分析を中心に』2巻（2000年度東京大学大学院人文社会系研究科博士課程進学審査論文）。セイン層に光を当てた論文として、Katheleen Mack, “Changing thegns: Cnut’s conquest and the English aristocracy,” *Albion* 16 (1984), pp.375-87.

¹³ ゴドウィン家に関して、Emma Mason, *The house of Godwine: the history of a dynasty*. London and New York 2004; Frank Barlow, *The Godwins. The rise and fall of a noble dynasty*. Harlow 2002; D. Raraty, “Earl Godwine of Wessex: The origins of his power and his political loyalties,” *History* 74 (1989), pp.3-19; Robin Fleming, “Domesday estates of the king and the Godwines: a study in late Saxon politics,” *Speculum* 58 (1983), pp. 987-1007; Ann Williams, “Land and power in the eleventh century: the estates of Harold Godwinson,” *Anglo-Norman Studies* 3 (1981), pp.171-87 & 230-34.

¹⁴ ASC CDE a. 1012 Plummer & Earle (eds.), *op. cit.*, p. 142.; Ian McDougal, “Serious entertainments: An examination of a peculiar type of Viking atrocity,” *Anglo-Saxon England* 22 (1993): 201-25.

寺院に埋葬することになった。証書欄署名順位で常に第一位を占め、イングランドにおける教会組織の頂点に立つカンタベリ大司教を惨殺したスヴェン軍の行為は、『アングロサクソン年代記』のなかで、「耐え難い行為」として紙幅が割かれている。

以上のような一連の行為によって、イングランド人が抱くことになったスヴェンに対する集合記憶を想像することはそれほど難しくない。その具体的な証言として、ヨーク大司教ウルフスタンが1014年にイングランド人に向けて語った説教『イングランド人に宛てたウルフスタンの説教』を見てみたい。

……至聖所は踏みにじられ、神の館からは古の諸特権が奪い去られ、そしてそれに相応しいすべてが奪い取られている。夫なき婦人は結婚を強いられ、多くのものが貧困へと追いやられて喘いでいる。無辜の貧者たちは、騙され欺かれ異国へと売り飛ばされている。年端もいかぬ子供たちはこうした輩の間で広まっている残酷で不正な法によって、些細な窃盗でも奴隷にされる。そして自由人の権利は抑圧され奴隷の権利は狭められ、なすべき慈善はうち捨てられている。つまり、神の法が嫌悪されその規定は軽んじられている。そのためわたしたちは神の怒りに触れ恩寵を失っているのだ¹⁵。

ここではスヴェン軍をはじめとするデーン人によってもたらされた被害が具体的に列挙されている¹⁶。この説教は、デーン人の襲撃、内乱、支配者のたて続く死などで窮地にあったイングランド人にむけてなされたものであり、その背後に、紀元千年をめぐる終末思想のにおいを嗅ぎ取ることができるかもしれない¹⁷。いずれにせよ、イングランド宮廷の公

¹⁵ Dorothy Whitelock (ed.), *Sermo Lupi ad Anglos*. 3 ed. London 1963, line 37-49: þearf is þre bote, for þam Godes ġerihta wanedan to lange innan þysse þeode on æghwylcan ænde, 7 folclaga wyrseadan ealles to swyþe, 7 halignessa syndan to griðlease wide, 7 Godes hus syndan to clæne berypte ealdra ġerihta 7 innan bestrypte ælcra ġerisena. 7 wydewan syndan fornydde on unriht to ceorle, 7 to mænege foryrmde 7 gehynede swyþe, 7 earme men syndan sære beswicene 7 hreowlice besyrwde 7 ut of bysan earde wide ġesealde, swyþe unforworhte, fremdum to ġewealde, 7 cradolcild ġeþeowede þurh wælhreowe unlaga for lytelre þyþe wide ġynd þas þeode, 7 freoriht fornumene 7 þrælrīht ġenyrdwe 7 ælmæsriht ġewanode; 7, hrædest is to cwepenne, Godes laga laðe and lara forsawene.

¹⁶ 『イングランド人に宛てたウルフスタンの説教』の同時代的意味は、Jonathan Wilcox, “Wulfstan’s *Sermo Lupi ad Anglos* as political performance: 16 February 1014 and beyond,” in: Matthew Townend (ed.), *Wulfstan, archbishop of York. The proceedings of the second Alcuin conference*. Turnhout 2004, pp.375-96.

¹⁷ Malcolm Godden, “Apocalypse and invasion in late Anglo-Saxon England,” in: Malcolm Godden, Douglas Gray and Terry Hoad (eds.), *From Anglo-Saxon to early middle English: Studies presented to E. G. Stanley*. Oxford 1994, pp.130-62.

的記録の意味を持つ『アングロサクソン年代記』において、スヴェンの死は喜びの表出とともに記されている¹⁸。彼の息子であるデンマーク・ヴァイキングの首領クヌートは、イングランド王に登位したそのときから、父スヴェンが積み重ねた諸行為に起因するデーン人に対する悪評を背負わなければならない運命にあったことは、彼のその後の政策を方向付ける重要な事実としてわたしたちは認識せねばならない。

3. クヌートの教会政策

いったんイングランド王となったクヌートは、その名のもとにさまざまな政策を打ち出すことでイングランド統治体制の確立を急いだ。その背後には、クヌートのブレインとして働いたヨーク大司教ウルフスタンの存在があったことはつとに指摘されている¹⁹。その一連の政策はヴァイキング侵入以前の国家システムが稼動するためのものであったが、ここではクヌート自身のイメージを高めることによって、スヴェンの息子であり「異教徒の君主」であるという悪評を払拭するプログラムが大きな割合を占めていたように思える²⁰。具体的な施策を四つあげておきたい。

第一に教会資産の保全と権利の確認である。ローソンはその研究書において、クヌート自身が発給した国王証書 (royal charter / diploma) と命令書簡 (writ) を合計 48 通あげている²¹。その中で真正性に疑いのもたれていないものは 19 通であるが、そのうち聖界領主に対するものが 13 通²²、世俗領主に対するものが 6 通となっている²³。もちろん、この比率は必ずしも現実の文書の発給比率を代表するものではないが、クヌートはその治世を通じて、スヴェンの襲撃時代に所有権等が混乱したと思われる聖界領主の不動産財産の回復につとめていたことは明らかである。

第二に教会施設等への写本等の寄進である。主として美術史家によって議論されてきた

¹⁸ ASC E a.1013. [Plummer & Earle (eds.), *op. cit.*, p. 144.]

¹⁹ ウルフスタン像をめぐる最新の研究は、Patrick Wormald, “Archbishop Wulfstan: eleventh-century state-builder,” in: *Wulfstan, archbishop of York*, pp.9-27. ここでは疲弊した国家再建者としてのウルフスタンの姿が強調されている。

²⁰ 実のところ、デンマークのイェリング王家は 10 世紀後半の段階よりキリスト教を公式に受け入れていた。したがってスヴェンもクヌートもキリスト教徒であった。問題は、デーン人がキリスト教徒か異教徒かという点ではなく、「キリスト教世界」の構成員にどのように認識されていたかという点である。デンマークのキリスト教化について、Michael Gelting, “The kingdom of Denmark,” in: Nora Berend (ed.), *Christianization and the rise of Christian monarchy. Scandinavia, central Europe and Rus’c. 900-1200*. Cambridge 2007, pp.77-87.

²¹ Lawson, *Cnut*, pp.233-35.

²² S. 950, 956, 964, 967, 968, 972, 973, 974, 975, 977, 978, 979, 1642.

²³ S. 955, 960, 963, 971, 969, 970.

ように、クヌートはイングランド各地の教会や修道院にさまざまな「美術品」を寄進している²⁴。たとえばカンタベリのクライスト・チャーチにはクヌートが被っていたとされる黄金の冠を²⁵、グラストンベリ修道院にあるエドマント王の墓には極彩色の孔雀を描いた刺繍を²⁶、そしてウィンチェスターのニュー・ミンスターには、金銀宝石で飾られた巨大な十字架などを寄進している²⁷。最後のものはおそらく冒頭で紹介したブリティッシュ・ライブラリーに所蔵されている「命の書」の挿絵に描かれた十字架の現物であったと思われる。

第三にクヌート法の制定と公布である。1020/21年のクリスマスにウィンチェスターで公布された²⁸。聖職者向けの内容から構成される第1部が26箇条、俗人向けの第2部が84箇条からなる²⁹。アングロサクソン期に公布されたイネ王以来の一連の法の中で構成上最も高い完成度を誇るこの法は、おそらく戦火で配偶者を失った寡婦の保護の制定をも含んでいる³⁰。その起草者はクヌート統治前半期にあつて知的指導者としての役割を果たしていたヨーク大司教ウルフスタンであったと考えられる³¹。

最後にアサンダンでの教会建立である。アサンダンの正確な場所は特定されないが、『アングロサクソン年代記』にしたがえば、エドマンド鉄腕王とクヌートの間で交えられた激戦の地であった³²。この戦いが契機となって、両者は再度イングランドを二分する協定を交わすにいたった。1020年、イングランド王となっていたクヌートは、顧問団とともに激戦地であったアサンダンへ赴き、そこに教会を建立した。双方の戦士層が多数命を失ったこの激戦地に教会を建立することによって、クヌートは、死者の慰霊を試みると同時に、

²⁴ Richard Gameson, *The role of art in the late Anglo-Saxon church*. Oxford 1995; A. T. Heslop, "The production of *de luxe* manuscripts and the patronage of king Cnut and queen Emma," *Anglo-Saxon England* 19 (1990), pp. 151-95; C. R. Dodwell, *Anglo-Saxon art. A new perspective*. Ithaca, NY 1982.

²⁵ S. 959.

²⁶ William Stubbs (ed.), William of Malmesbury, *De gestis regum*. London 1887, vol. 1, p.224: pallium versicoloribus figures pavorum, ut videtur, intextum.

²⁷ Benjamin Thorpe (ed.), Florence of Worcester, *Chronicon ex chronicis*. 2 vols. London 1848-9, vol. 2, pp.133: crux magna, crux sancta, iussu Regis Canuti dudum fabrica, et ab eodem auro et argento, gemmis et lapidibus pretiosis decentissime adornata.

²⁸ クヌート法の草案は1018年の段階で作成公表されている。A. G. Kennedy, "Cnut's law code of 1018," *Anglo-Saxon England* 11 (1983), pp.57-81.

²⁹ Patrick Wormald, *The making of English law: King Alfred to the twelfth century I. Legislation and its limits*. Oxford 1999.

³⁰ Stephanie Hollis, "The protection of God and the king: Wulfstan's legislation on widows," in: *Wulfstan, archbishop of York*, pp.443-60.

³¹ Lawson, *Cnut*, pp. 56-63; Dorothy Whitelock, "Wulfstan and the laws of Cnut," *English Historical Review* 68 (1948), pp.433-452.

³² Warwick Rodwell, "The battle of Assandun and its memorial church: a reappraisal," in: Janet Cooper (ed.), *The battle of Maldon. Fiction and fact*. London and Rio Grande 1993, pp.127-58.

アサンダンの地を、デーン人とイングランド人の決戦がおこなわれた「記憶の場」へと意味づけした³³。

以上の政策は、いずれにせよ、イングランドのキリスト教会の復興に資するものであった。かような政策を通じてクヌートは自身のイメージを高め、スヴェンの遺産を払拭しようとしたと思われる。それではなぜクヌートは、スヴェンの後継者にして異教の王であるという風聞を払拭しなければならなかったのだろうか。結論を言えば、そのような風聞は、クヌートのそれ以降の統治において、大きな障害物となったからである。以下では対内的要素と対外的要素に分けて、この点を掘り下げてみたい。

4. 政策の背景 (1) 対内的要素

私たちは、クヌートがその王位を獲得したイングランドが、いかにクヌートの出自したデンマークと異なる環境にあったのかを忘れてはならない。体系化され文字化された法、整備された文書制度、効率的に租税を徴収することのできる徴税システム、中央と連携したヒエラルヒッシュな地方行政管区³⁴。これらはいずれも中世キリスト教国家の形成途上にあつたデンマークには存在しない統治手段であり、王として登位したクヌートにとってこれまで経験したことのないシステムであつたことは推測できる³⁵。そしてこれらのシステムを支えていたのは聖職者集団であつた。アングロサクソン期イングランドにおける最高の意志決定機関である顧問会議には、王族と世俗有力者層に加えて常に司教及び修道院長をはじめとする高位聖職者が名を連ねていた³⁶。そして彼らはそれぞれ司教領や修道院領の長という聖界領主として政治参加を果たす一方で、世俗領主にはできない統治実践上の役割を担っていた。具体例として三点指摘したい。

³³ クヌート治世においてこの「記憶の場」がどのような機能を果たしたのか興味あるところであるが、ここではこれ以上論じる余裕がない。

³⁴ アングロサクソン期イングランドの行政機構に関しては、Ann Williams, *Kingship and government in pre-conquest England, c.500-1066*. New York 1999; Henry R.Loyn, *The governance of Anglo-Saxon England, 500-1087*. London 1984; James Campbell, “The late Anglo-Saxon state: A maximum view,” in: Id., *The Anglo-Saxon state*. London 2000, pp.1-31.

³⁵ ただクヌート以前よりデーン人は、大陸とイングランド双方のルートを通じて、機能的な行政機構について学ぶ機会があつた。Minoru Ozawa, “Scandinavian way of communication with the Carolingians and the Ottonians,” in: Shoich Sato (ed.), *Hermeneutique du texte d'histoire: orientation, interpretation et questions nouvelles Proceedings of the sixth international conference: Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration* (Global COE Program International Conference Series, No. 6). Nagoya 2009, pp.65-75.

³⁶ 顧問会議に関する基本的文献は、T.J. Oleson, *The witenagemot in the reign of Edward the Confessor*. Toronto 1955; Felix Liebermann, *The national assembly in the Anglo-Saxon period*. Halle 1913.

ひとは文書作成業務である。アングロサクソン世界は、法、国王証書、命令書簡、遺書といった法実務文書の多くが古英語で書かれている点で歴史上特異な地位を占めている³⁷。ソーヤーのカタログによれば7世紀からノルマン征服までの現存する行政文書は写しも含めて二千枚に及ばないが³⁸、M・クランチーの見解を受け入れるならば、実際には残存文書の数十倍から数百倍の文書が作成されていたと考えられる³⁹。それではこのような行政文書は誰が作製していたのだろうか。大陸に比べアングロサクソン期イングランドの文書局については不明な点が多いが、教会や修道院施設で教育を受けた写字生の存在が不可欠であったことは確かである⁴⁰。行政文書だけではなく、書簡、法、年代記記録などにも文書の知識は必要であったし、それらを解読して国王サークルに情報を伝えることを可能とするのも聖職者であった。その前提として聖界施設での文書教育は不可欠であった。

第二点は外交使節としての任務である。聖職者、とりわけ司教は教会内問題の解決を図るために頻りに国内外の教会会議に出席した⁴¹。それだけではなく、時として国王の代理として政治的な目的で他国の統治者のもとへ赴くこともあった。これは彼ら聖職者層が備えている高度な教養と国際語であるラテン語の活用能力にくわえ、聖職者という立場の含意する普遍性と中立性が対外交渉において意味を持っていたからだと考えられる⁴²。まずは「聖俗の問題いずれにも精力的であった」と形容されたカンタベリ大司教リフィングである。クヌートが1020年にイングランド臣民に宛てた書簡から判断する限り、リフィングは、1017年のクヌートのイングランド王への即位後ローマ教皇のもとへ向かい、イングラ

³⁷ Simon Keynes, "Royal government and the written word in late Anglo-Saxon England," in: Rosamund McKitterick (ed.), *The Uses of Literacy in early medieval Europe*. Cambridge 1990, pp. 226-57: 日本語文献として、森貴子「アングロ＝サクソン期文書における古英語の利用 ウスター司教座関連文書の検討から」藤井美男・田北廣道編『ヨーロッパ中世社会の動態像 森本芳樹先生古希記念論集』（九州大学出版会、2004年）87-110頁。

³⁸ Peter H. Sawyer (ed.), *Anglo-Saxon charters: an annotated list and bibliography* (Royal Historical Society Guides and Handbooks 8). London 1968. ただし現在は、このカタログの改訂版をウェブ上で検索することができる。British Academy & Royal Historical Society, Joint committee on Anglo-Saxon Charters, *The Electronic Sawyer: an online version of the revised edition of Sawyer's Anglo-Saxon Charters*, section one [S 1-1602] (<http://www.trin.cam.ac.uk/chartwww/eSawyer.99/eSawyer2.html>).

³⁹ Michael Clanchy, *From memory to written record. England 1066-1307*. 2 ed. Oxford 1993.

⁴⁰ クヌート期の文書局について、Lawson, *Cnut*, pp.236-44.

⁴¹ イングランドと大陸との交流について、Veronica Ortenberg, *The English church and the continent in the tenth and eleventh centuries. Cultural, spiritual, and artistic exchanges*. Oxford 1992. またアングロサクソン初期の状況については、J.T. Palmer, *Anglo-Saxons in a Frankish world*. Turnhout 2009.

⁴² Sean Gisdorf, "Bishops in the middle: mediatory politics and the episcopacy," in: Sean Gisdorf (ed.), *The bishop: power and piety at the first millennium*. Münster 2004, pp. 51-73.

ンド王クヌートに対する要望を書き連ねた書簡を持ち帰っていたことが確認できる⁴³。別の事例も見てみたい。『アングロサクソン年代記』によれば、「パッリウムを受け取るために」、1022年にはカンタベリ大司教エゼルノースが、1026年にはヨーク大司教エルフリッチがローマに向かった⁴⁴。伝存する史料からは必ずしも明示しないが、彼らも、単なる宗教上の必要儀礼というだけでなく、政治上の問題解決も含めた使節としての役割を果たしていた可能性がある⁴⁵。

第三点は、政治イデオロギーの創出とその印象づけの関与である。統治者に特有の支配イデオロギーは支配者に不可欠である。すでに何度か言及したように、クヌートのブレーンとして支配イデオロギー全体の構想を引き受けていたのはヨーク大司教ウルフスタンであった。通常国王証書の署名欄においてカンタベリ大司教が王族に継ぐ署名順位を確保しているが、ウルフスタンはほぼ一貫してその次の順位を維持しており、クヌート宮廷でのウルフスタンの地位の高さが伺える⁴⁶。ウルフスタンの求める理想の君主像は、彼自身の手になる一種の君主鏡『政治提要』に描き出されている⁴⁷。彼はここで描かれるキリスト教的君主思想に基づき統治体制の見取り図を創りあげる作業に取りかかったと考えられる。クヌートにまわりつく「悪評」をいかに払拭し、信仰篤い「キリスト教王」としての姿を周囲に印象づけるべきか。ウルフスタンは1023年にこの世を去るが、彼の練り上げたプログラムは、法の制定、証書内の称号、冒頭に挙げた写本に描かれる図像、そして折り触れて挙行された王の儀礼——ただし記録はほとんど伝わっていない——を通じて、ウルフスタンの思想を継承する教会関係者の手で継続的に実現されていったように思われる⁴⁸。

⁴³ Felix Lieberman (ed.), *Gesetze der Angelsachsen*, 3 vols. Halle 1917-21, vol 2. p. 273: Ic nam me to gemynde þa gewritu 7 þa word þe se arceboscop Lyfing me fram þam papan brohte of Rome, þæt ic acolde æghwær Godes lof upp aræran 7 unriht alcecgan nad full frið wyrcean be ðære mihte þe me God syllan wolde.

⁴⁴ ASC CDE a. 1022, D a. 1026. [Plummer & Earle (eds.), *op. cit.*, p. 155f.]

⁴⁵ クヌート治世におけるローマとの関係について、Henry R. Loyn, *The English church 940-1154*. Harlow 2000, pp. 53-55. また、後期アングロサクソン時代の聖職者のローマ巡礼の意義について、Veronica Ortenberg, “Archbishop Sigeric’s journey to Rome in 990,” *Anglo-Saxon England* 19 (1990), pp. 197-246.

⁴⁶ Simon Keynes, *An atlas of attestations in Anglo-Saxon charters, c.670-1066*. Cambridge: Department of Anglo-Saxon, Norse, and Celtic, University of Cambridge, 2002, table lxvi.

⁴⁷ アングロサクソン期の君主鏡として重要な意味を持つ『政治提要』に関する十分な分析はまだなされていない。Karl Jost (ed.), *The Institutes of Polity*. Berne 1959. 本作品がそもそもウルフスタンのものかどうかという点でも議論があったが、ワーモルドはウルフスタンの作としている。Wormald, “Archbishop Wulfstan,” p. 27

⁴⁸ たとえば「命の書」の写本に見えるクヌートの王冠は、ドイツ皇帝のものと類似しているという指摘がある。たとえば Jan Gerchow, “Prayers for king Cnut,” pp. 219-31.

5. 政策の背景（2）対外的要素

すでに確認したように、クヌートの寄進はイングランド内にとどまるわけではない。1018/19年にクヌートに宛てたシャルトル司教フルベールの書簡からは、クヌートがシャルトルに対しても何かを寄進したことが読みとれるし⁴⁹、『聖ウルフスタン伝』の記述からはケルンへ豪華写本を送ったことも確認できる⁵⁰。さらに、クヌートの妻エンマに捧げられた『王妃エンマ讃』の第2書20節をひもとくならば、次のような表現を目にする。

これまでクヌートの贈り物を享受していない教会があるだろうか。しかしながら、彼自身の王国に建設された（教会に）なしたことは言うまでもなく、イタリアは彼の魂を毎日祝福し、ガリアは彼が財を賜るように要求し、なにをおいてもフランドルは彼の魂が天でキリストとともに喜ぶことを祈った。というのも彼はこれらの地域を通過してローマへ向かい、多くの点で明らかなように、この道すがら多くの慈善活動をおこなったからである⁵¹。

これは1027年にクヌートがフランドルを経てローマへ向かう行路上の出来事を描写したシーンである。ここには彼が、イングランドだけではなく、イタリア、ガリア、フランドルの教会に対して惜しみなく寄進をしたことが記されている。もちろん『王妃エンマ讃』はノルマンディ公女にしてクヌート妃であったエンマを顕彰するための文献であり、彼女の夫であるクヌートに対しても好意的な筆致であることは確かである⁵²。それゆえ叙述全

⁴⁹ Francis Behrends (ed.), *The Letters and Poems of Fulbert of Chartres*. Oxford 1976, no.37 (pp. 66-68): Quando munus tuum nobis oblatum vidimus, sagacitatem tuam et religionem pariter admirati sumus

⁵⁰ Reginald R. Darlington (ed.), *The Vita Wulfstani of William of Malmesbury*. London 1928, p. 16: quidam sacramentarium et psalterium de quibus supra dixi, deidit in exenium. Ambos enim codices ut sue memorie apud illas gentes locarete grciam ; Cnuto quondam miserat Coloniam.

⁵¹ Alistair Campbell (ed.), *Encomium Emmae Reginae*, with a supplementary introduction by Simon Keynes, Cambridge 1998, II-20 (p.36): Quae enim ecclesia adhuc eius nin letatur donis? Sed ut sileam quae in suo regno positis egerit, huius animam cotidie benedicat Italia, bonis perfrui deposcit Gallia, et magis omnibus hanc in caelo cum Christo gaudere orat Flandria. Has enim provincias transiens Romam petiit et, ut multis liquet, tanta hoc in itinere misericordiarum opera exhibuit, ut, si quis haec describere omnia veluerit, licet innumerabilia ex his fecerit volumina, tandem deficiens fatebitur, se vix etiam cucurrisse per minima.

⁵² きわめて装飾的な文体で書かれている上に、史料の性質上、エンマの係累を賞賛する『エンマ讃』の記述内容に関して、かつてアングロサクソン史家は否定的な態度をとっていた。しかしながら近年の歴史家は、『エンマ讃』が提供する情報に大きな価値を見出している。Elizabeth M. Tyler, "Talking about history in eleventh-century England: the *Encomium Emmae Reginae* and the court of Harthacnut," *Early Medieval Europe* 13 (2005), pp.359-83; F. Lifshitz, "The *Encomium Emmae Reginae*: A 'political pamphlet' of the eleventh century?," *Haskins Society*

体を通じてクヌートの行為を誇張していることも少なくないが、その点を差し引いたとしても、クヌートによる教会への寄進はヨーロッパの中核全域に及んでいることが示唆されている。

イングランド内の聖職者がクヌートの統治にとってどのような意味を持っていたのかはすでに確認した。それでは、このような自らの支配領域の外部にある宗教施設に対する大規模な寄進行為によって、クヌートは何を求めていたのだろうか。もちろんそこにはキリスト教徒としてのクヌート個人の信仰心を認めることも吝かではないが、同時代のヨーロッパ政治地図を想起した場合、そのような個人的心理ではなく、政治力学上の意味合いが浮かび上がってくるように思われる。

9世紀の後半にカロリング的政治秩序が崩壊して以来、ヨーロッパ各地では在地有力諸侯が割拠する時代を迎えた。その後の帰結は西フランク領域と東フランク領域で異なっていた。西フランク王国を継承した新興王朝であるカペー朝は、紀元千年前後の段階においては王領地の総面積も少なく、軍事力という点では北海に面するブルターニュ、ノルマンディ、フランドルのような諸侯のほうが優位であったように見える⁵³。他方で東フランク王国の継承者であるオットー朝ドイツは、周辺諸権力に対してヘゲモニー力を発揮し、布教政策と婚姻政策を通じて、ポーランド、ベーメン、ハンガリーという新興国家を自らの政治圏に引き込むことに成功した⁵⁴。10世紀の最末期、新興三国はそれぞれボレスワフ勇敢公、ボレスワフ2世、イシュトヴァーン聖王を統治者としていただき、キリスト教を軸として国内の統合を進めると同時に、ヨーロッパ政治の舞台へと登場した⁵⁵。ここでいうヨーロッパとは、キリスト教を信仰する君主国家の領域のみによって構成される歴史的空間であるキリスト教世界（Christianitas）を指す。当時の支配者はいずれもキリスト教世界の長であるローマ教皇と一定の関係を保持し、そうすることによってキリスト教世界で展

Journal 1 (1989), pp. 39-50; Alistair Campbell, "The Encomium Emmae Reginae: personal panegyric or political propaganda?," *Annuaire Mediaevale* 19 (1979), pp. 27-45.

⁵³ 北海に面したこの三つの諸侯領の動静に関して、David Bates, "West Francia: the northern principalities," in: Timothy Reuter (ed.), *The New Cambridge Medieval History III, c.900-c.1024*. Cambridge 1999, pp. 398-419.

⁵⁴ オットー朝ドイツに関して、Gert Althoff, *Die Ottonen. Königsherrschaft ohne Staat* (Urban Taschenbücher 473). Stuttgart 2000; Timothy Reuter, *Germany in the Early Middle Ages 800-1056*. London and New York 1991; Helmuth Beumann, *Die Ottonen* (Urban Taschenbücher 384). 3 ed. Stuttgart 1987.

⁵⁵ 各国のナショナルヒストリーに加えて、ドイツとの関係に十分に配慮した以下の論文集の一連の論考を参照。Nora Berend (ed.), *Christianization and the rise of Christian monarchy. Scandinavia, central Europe and Rus' c.900-1200*. Cambridge 2007; P. Urbanczyk (ed.), *Europe around the year 1000*. Warszawa 2001.

開される政治ゲームのプレーヤーとなり得ていた。

クヌートはイングランド王となった以上、この政治ゲームの中に組み込まれることは不可避であった。さらにクヌートは、ただイングランドの王であっただけではなく、1019年には兄ハーラルを継承してデンマーク王位も獲得し、イングランドとデンマーク双方にまたがる海上支配体制を手中にした。この海上支配体制は、一見するとクヌートが保持していた軍事力の反映であるかのように理解されるが、必ずしもその統治は容易であったわけではない。イングランドでは聖俗諸侯の不満がくすぶっていたし、1020年の書簡から明らかかなようにデンマークではしばしば反乱が起こっていた⁵⁶。そのような内的問題に加えて、イングランドの南にはノルマンディ公、デンマークの南にはオットー朝ドイツという同時代でもっとも力のある政治体が控えていた。このような緊迫した内外の政治的緊張状態に置かれていたクヌートが、まずなすべきは、北ヨーロッパ世界の政治ゲームの中で、ある種安定した立場を早急に確保することではなかっただろうか。そしてそこへ参画するための最低条件は「キリスト教王 rex Christianus」として周囲に認識されることであった。

すでに確認したように、紀元千年のヨーロッパ世界というのは、あくまでキリスト教世界のことである。そしてその領域外は改宗活動の対象であるに過ぎず、「異教徒の君主」との認識を持たれたままでは、政治ゲームの一員の資格を得ることができなかった。クヌートによる支配領域外での熱心な寄進活動の理由の一つは、この資格を得ることであったと考えられる。在地王権と深くつながっていた大陸の教会や修道院の有力者は、寄進者であるクヌートについて、自らと関係の深い君主に肯定的な評価を伝えたかもしれない。認識の変化を伝える大陸側の証言を二つ紹介したい。ひとつは先ほども引用したシャルトル司教フルベールによるクヌート宛の書簡にみえるフレーズである。

⁵⁶ このような反乱の性格どのようなものであるのか書簡内容からは判断できないが、クヌートの治世中、デンマークのみならず北欧内では、何度か問題が生じていることが確認できる。そのような問題の中で最大のものは、1026年のヘリエオーの戦いである。この戦いにおいて、デンマーク在地有力者ウルフ——のちデンマークの新王朝を開くスヴェン・エストリズセンの父——は、スヴェーア王アーヌンド・ヤーコブと反クヌート連合を結んだ。『アングロサクソン年代記』の記述に従えば、この戦いでクヌートは敗北したと理解される。ASC E a. 1025. [Plummer & Earle (eds.), *op. cit.*, p. 157.]: þær wæs swiðe feala manna forfallen on Cnutes cynges healfe. ægðer ge Daniscra manna ge Engeliscra. 7 þa Sweon heafdon weallstowe ge weald (クヌート王の側では、デー人とイングランド人を問わず数多くの者が斃れた。戦場で優位に立ったのは [= 戦勝した] のはスヴェーア人であった) .

異教徒の君主であると聞いていたあなたがキリスト教徒であったばかりではなく、教会と神の僕に対してこの上なく寛大であるということをはっきりと理解した⁵⁷

ここでフルベールは、かつてクヌートは異教徒の君主であると認識していたが、寄進を受けることを通じて、彼がキリスト教徒であり、かつキリスト教会に対して寛大であることを認識したと明言している。もうひとつはドイツの年代記作家メルセブルクのティエトマルが1018年にまとめた『年代記』には次のように描写されている。

彼（クヌート）は、以前父（スヴェン）とともにその地域（イングランド）の侵略者であり苛烈なる破壊者であったが、人気のないリビアの砂漠でバシリスクがそうであったように、いまやイングランド唯一の守護者であった⁵⁸

ここでティエトマルは、かつてスヴェンもクヌートもイングランドの侵略者であったが、いまは「イングランド唯一の守護者」になったと、クヌートをバシリスクに喩えながら認識の変化を伝えている。この二つの知識人による証言は、いずれも、1018 / 19年という、クヌートがイングランド王に即位して直後の時期に執筆されている。この事実をわたしたちは重く受け止めねばならない。すなわちフランスのシャルトルでもドイツのメルセブルクでも、クヌートは、以前はイングランドを侵略するキリスト教世界の敵であると認識されていたにもかかわらず、1018 / 19年という時点で、キリスト教徒であるという認識へと変化しているのである。この事実を踏まえるならば、クヌートをキリスト教世界においてキリスト教王として認識させるという目的をもった彼による教会政策は、十分な成果をあげたように思われる。

6. 普遍権威へ

否応なく継承せざるを得なかった父の「悪評」。その悪評ゆえにクヌートはキリスト教徒であるにもかかわらず「異教徒の君主」との評価を受けていた。そのような出発点に立たされていたクヌートは、イングランド王としての統治実践において聖職者集団の協力が

⁵⁷ Francis Behrends (ed.), *The Letters and Poems of Fulbert of Chartres*. Oxford 1976, no.37 (p. 6): quem paganorum principem audieramus, non modo Christianum verum etiam erga ecclesias, atque Dei servos benignissimum largiorem agnoscimus

⁵⁸ Werner Trillmich (ed.), Thietmar von Merseburg, *Chronicon*. Darmstadt 1957, viii-7 (p. 448): et qui prius cum patre huius erat invasor et assiduus destrudtor provinciae, nunc solus sedit defensor, ut in libicis basiliscus harenis cultore vacuis.

不可欠である一方、海上王国の君主として、今まさに拡大のさなかにあるキリスト教世界の政治ゲームへと参画すべき立場におかれていた。クヌートによる国内外の教会施設に対する寄進行為は、クヌートの統治活動にとって障害以外の何者でもないその「悪評」を雪ぎ、国内の聖職者の協力を取り付け、キリスト教世界の政治システムに参加するためのプログラムであったというのがわたしの仮説である。

「キリスト教王」として周囲に認識されつつあったクヌートは、その統治の後半期にいたると、海上支配体制の統治者として次の段階へと進んだ。それはドイツ皇帝とローマ教皇という、当該時代における二つの普遍権威との接触である。前述したように、クヌートは大司教を通じてその即位の直後より教皇との連絡は保っていた。しかしながら 1027 年、『アングロサクソン年代記』や『王妃エンマ讃』に記録されているように、王自身が直接ローマへ向かうことになった⁵⁹。そしてクヌートは、ローマにあるいくつかの至聖所を訪問したのち、1027 年の書簡にあるように、時の教皇ヨハネス 19 世との間に大司教に課されるパリウムと引き換えの貢納金の免除を確認する協約を取り交わした⁶⁰。

もちろんデンマークとドイツは、ハンブルク＝ブレーメン司教座を通じて 10 世紀初頭以来深い関係があった。しかしながらスヴェンからクヌート治世の初期にかけて、歴史史料は明確な証言を残していない⁶¹。ターニングポイントは、クヌートが 1027 年ローマを訪れた際に、ザリアー朝初代皇帝コンラート 2 世の皇帝戴冠式に出席したことであった⁶²。このとき列席していた海外君主は、クヌートとブルグント王ルードルフのみであった。そ

⁵⁹ *Encomium Emmae Reginae*, II-20 (p. 36): Has enim prouintias transiens Romam petiit et, ut militis liquet, tanta hoc in itinere misericordiarum opera exhibuit, ut, si quis haec describere onia uoluerit, licet innumerabilia ex his decerit uolumina, tandem deficiens fatebitur, se uix etiam cucurrisset per minima,

⁶⁰ *Gesetze der Angelsachsen*, vol. 1, p. 276: Conquestus sum iterum coram domino papa et mihi valde displicere causabar, quod mei archiepiscopi in tantum angariabatur immensitate pecuniarum quae ab eis expetebatur, dum pro pallio accipiendi secundum morem apostolicam sedem expeterent; decretumque est ne id deinceps fiat.

⁶¹ ブレーメンのアダムは、スヴェンの治世期に、ハンブルク＝ブレーメン大司教リアヴィゾが、スヴェンの宮廷に改宗の許可を求めて訪れたことを伝える。Walther Trillmich & Rudolf Buchner (eds.), *Quellen des 9. und 11. Jahrhunderts zur Geschichte der hamburgischen Kirche und des Reiches*. Darmstadt 2000, Adam von Bremen, *Gesta Hammaburgensis ecclesiae pontificum*, II-29 (pp. 264-66): Quo tempore cum magnam Suein rex persecutionem christianorum exercuisset in Dania, fertur archiepiscopus supplicibus legatis et crebris muneribus laborasse, ut ferocis animus regis christianis mansuetum redderet (…… (リアヴィゾ) は前任者と同様に大変な熱意を持って異邦人への使節を派遣した。その頃スヴェン王がデンマークでキリスト教徒を激しく迫害しており、大司教は礼儀をわきまえた使節と多くの贈り物によって、荒々しい王の心をキリスト教徒にとって優しくしようと腐心していた。)

⁶² コンラート 2 世に関して、Herwig Wolfram, *Conrad II, 990-1039. Emperor of three kingdoms*. University Park, Pa. 2006.

の結果としてクヌートが皇帝から得たものを、ブレーメンのアダムは次のように伝えている。

力ある皇帝コンラートが統治を後継し……彼は大司教の仲介でデーン人とイングランド人の王と和平を結んだ。皇帝は彼の娘を実息の妻として所望する代わりに、アイダー川の先に広がる辺境地を含めたスレスヴィを盟友の印として与えた。その時以来その地はデンマーク王国の所有となった⁶³。

ここで述べられているのは、皇帝家とクヌート王家との間の王朝間婚姻ならびに、長年デンマークとドイツの間で係争地となっていたスレスヴィのデンマークへの譲渡である。その後 1036 年には——クヌートはすでにこの世を去っていたが——クヌートの娘グンヒルドとコンラート 2 世の後継者ハインリヒ 3 世が結婚する結果となった⁶⁴。

ドイツ皇帝とローマ教皇という二つの普遍権威の承認を得ることができれば、ヨーロッパ世界において、クヌートがキリスト教王であることを疑うものはいなくなったことだろう。クヌートとドイツ皇帝ならびにローマ教皇との関係をふり返ってみた場合、クヌートがもはや「異教徒の君主」ではなく「海上王国のキリスト教王」として、紀元千年前後のヨーロッパ政治において、不可欠のプレーヤーの地位を手にしていたことを示しているのではないだろうか。

通常中世ヨーロッパ世界において王がキリスト教君主であることは自明の前提として話が進められてきた。しかしながら紀元千年前後の北ヨーロッパ世界において、キリスト教はなおすべての領域を覆い尽くしていた信仰システムではなかった。とりわけデンマークは、960 年代にハーラル青歯王によってキリスト教が導入され、彼の子供であるスヴェン双髭王、その子であるクヌートもキリスト教徒であったにもかかわらず、そのキリスト教世界に対する略奪活動によって、キリスト教徒との認識はほとんどなされていなかったと

⁶³ Adam von Bremen, *Gesta Hammaburgensis ecclesiae pontificum*, II-56 (pp. 294-96): Cui successit in sceptrum fortissimus cesar Conradus..... Cum rege Danorum vel Anglorum mediante archiepiscopo fecit pacem. Cuius etiam filiam imperator filio suo deposcens uxorem, dedit [ei] Sliaswig [civitatem] cum marcha, quae trans Egdoram est, in fedus amicitiae; et ex eo tempore fuit regum Daniae.

⁶⁴ ドイツとデンマークの関係に関して、Erich Hoffmann, “Beiträge zur Geschichte der Beziehungen zwischen dem Deutschen und dem Dänischen Reich für die Zeit von 934 bis 1035,” in: C. Radtke & W. Körber (eds.), *850 Jahre St-Petri-Dom zu Schleswig, 1134-1984*. Schleswig 1984, pp. 97-132; Sture Bolin, “Danmark och Tyskland under Harald Gormsson. Grundlinjer i dansk historia under 900-talet,” *Scandia* 4 (1931), pp. 184-209.

いう現実があった。たしかにクヌートはイングランド王となった。しかしながら、キリスト教世界の一部であったイングランドの王として承認されるためには、そしてイングランド王としてキリスト教世界という当時の国際関係のなかで一定の立場を得るためには、キリスト教王であることを名実ともに認めさせねばならなかった。1031年に作成された『ニュー・ミンスターとハイド修道院の命の書』とその挿絵は、君主としての地位を教皇と皇帝にも認めさせたクヌートが、キリスト教王としての自分を顕彰しようとして挿絵画家に描かせたと理解することも可能かもしれない。

本日の報告では教会政策という観点からクヌートの治世をふり返ってみた。クヌートは、デンマークというキリスト教世界の辺縁——ただしクヌート自身はキリスト教徒——を出自として、イングランドというキリスト教世界の先進地の支配者となった。従来の研究ではこの点を見過ごしていたように思えるが、クヌートは、文字文化においても、キリスト教化においても、国家システムにおいても対比的ともいえるイングランドとデンマークをつなぐ一人のキーパーソンであった。中世ヨーロッパ史はしばしばキリスト教世界と同一のものとして描かれがちであるが、クヌートの統治実践に目を向けるならば、ヨーロッパ世界、とりわけ紀元千年前後の北ヨーロッパ世界は、ただキリスト教の存在を自明の前提として議論をすすめるわけにはいかないことを教えてくれるだろう。

キリスト教王となるヴァイキング



☒ British Library, Ms Stowe 944 6r